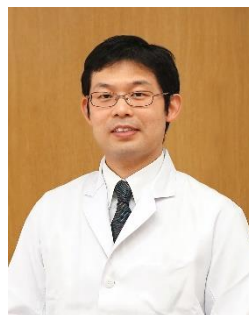


第2代理事長・第7代院長

柴田 大明(シバタ ヒロアキ) プロフィール

1980年(昭和55年)7月31日

～2022年(令和4年)9月19日(享年42歳)



【経歴】

野田学園高等学校 卒業(野田学園高等初の医学部進学者) 帝京大学医学部に入学し、卒業後、帝京大学医学部附属病院 臨床研修医を修了した後、山口大学医学部附属病院にて、初の後期研修医を修了した。

その後、美祢市立美東病院、山口大学医学部附属病院、セントヒル病院にて、消化器内科医としての修練を経て、平成29年4月に医療法人社団水生会 柴田病院 入職と同時に院長に就任。平成31年2月 父である初代理事長 柴田 眼治からの事業承継を行い、医療法人社団水生会 理事長に就任。

【医師としての主な取り組み】

専門である消化器内科医としての治療だけでなく、院長就任と同時に、救急医療に奔走し、かかりつけ患者さんはもちろん、入院を必要とする患者さんも多く受け入れ、救急搬送件数は右肩上がりに急増した。

また、『痔の柴田』と言われるまでになった父 柴田 眼治の跡を継いで、消化器内科医でありながら、肛門疾患の診察も精力的に行い、手術の執刀も行った。

さらに、山口市で第一号となる人工透析センターを開設した当院の地域での立ち位置を考慮し、セントヒル病院にて、透析治療を修練・研鑽し、シャントの狭窄に対する経皮的血管拡張術(PTA)も修得した。

加えて、リハビリや疼痛緩和にも興味を持ち、整形外科研究会等に参加するなどして、エコー下における生理食塩水注射による筋膜の癒着を剥がす、ハイドロリリース(筋膜リリース)の手技も会得し、痛みの治療にも積極的に取り組んだ。

その他、夜間急病診療所出務、休日内科当番、介護保険審査会や医師会活動をはじめ、産業医、学校医、山口済生会病院の研修医指導(地域医療研修)など、地域の患者さんばかりでなく、医師会・医療機関・企業・団体からの要望にも快くお引き受けし、何事にも真摯に誠実に対応した。

これらの取り組みや地域ニーズ、水生会の歴史背景を鑑み、総合医になる事を自分の使命とし、地域の患者さんのために、幅広い疾患に対応し、地域に求められる医療を患者さんの視座に立って提供した。

【院長としての主な取り組み】

院長として、自らが率先して、多くの患者さんを診療すると同時に、病院機能を充実化させるために、山口大学の協力を得て、呼吸器内科の開設、眼科手術の再開を実現した。

また、時代の要請でもあり、山口市の課題でもあった回復期病床の増床について、全60床の病棟を全床地域包括ケア病棟とし、地域包括ケアシステムの一翼を担う回復期病院としての位置付けを確立した。

院内の職場づくりにも力と心を注ぎ、チーム医療を大切にし、職員の和を尊び、職種や職位の垣根を超えて、相手を思いやる関係性を作ることに尽力した。2018年に実施した職員活性度調査(ES・NavigatorⅡ)では、回復期病院部門で、全国1位を受賞するなど、職員の意識改革の実現と継続的改善を行った。

【理事長としての主な取り組み】

大きくなった水生会グループ【病院（60床）、老健（100床）、有料老人ホーム（3施設：計130床）、在宅支援部門（居宅・訪看・訪リハ・ヘルパー・デイサービス・地域包括支援センター）】の法人内連携が上手く機能するよう切れ目となりやすいウィークポイントを補完し、適材適所の人員配置を行い、有事の際には自らも率先して動き、円滑な法人内連携を行い、ひいては、信頼される法人外連携を構築した。

在宅復帰を実現する社会を創造していくために、令和2年3月に住宅型 有料老人ホーム Re Life しずくを開設し、令和4年4月には、提携有料老人ホームであったアヴィラージュ山口湯田温泉を直営化し、Re Life 湯田温泉として運営を開始した。

また、同年同月に高齢者のご相談ニーズの増加に伴い、山口市の要請を受け、山口市北東第2地域包括支援センターを仁保・宮野エリアに開設した。

これら一連の取り組みによって、初代理事長 柴田 眼治が築いた水生会の保健・医療・福祉の礎をさらに深化・推進し、山口市の地域包括ケアシステムの一翼を担う医療法人へと発展させた。

【理念に馳せた想い】

初代理事長 柴田 眼治の時代に発案された基本理念は、時間の経過とともに形骸化したものになりつつあった。そもそも理念とは何か。という本質を探究する中で、『理念とは、ある集団が、同じ方向に進んでいくための目印であり、理想を実現化するために、強い思いをもって』という解釈にたどり着くまでに至った。また、理念の意味を考え、活用し、理念に基づいた行動に繋げていくために、わかりやすい解説と図解を駆使し、理念動画を制作し、全職員への理念研修も実施する中で、水生会の基本理念に魂を吹き込んだ。そして、自らが魂を吹き込んだ基本理念を率先して活用し、まず自らが理念の体現者となる事を旨とし、同時に、先頭に立って、水生会職員一同を理念の実現に向けた道へと導いた。

[→【理念動画】←はこちらから](#)

【当たり前の幸せ】

令和2年6月に開催した経営方針発表会で、次の2つの問いに対し、以下のように回答を述べた。

Q1. なぜ水生会があるのか？ ⇒ 理念を叶えていくため

Q2. なぜ理念を叶えたいのか？⇒ みんなが幸せになるため

2つの問いに対する回答は、当たり前と言えば、当たりの事かも知れない。しかし、この『当たり前』が最も大切で、大変なことであると考え、職員に説き、みんなが幸せになるための基本を疎かにせず、何事にも丁寧、誠実に対応することを心がけ、少しずつ職員にも伝播され、組織の風土づくりを行った。

【経営者への道】

㈱日本経営が主催する後継者塾に第一期生として参加し、多くの同期受講者が認めるほど、真摯に取り組んだ。中でも、ストレングスファインダーやMBTI等の自らの性格や強みを知り、リーダーシップを発揮していくための自己研鑽には特に力を注いだ。

また、多くの交流を通じて、相手の立場に立ち、状況を理解し、相手のためになることを行う事で、医師としても、経営者としても、そして何より、人間として成長することを遂げた。

【総合医への道・ICLS】

自身が目指す総合医になるために総合医育成プログラムを受講し、筑波大学で開発、推進しているノンテクニカルスキル研修に注力し、医学・医療スキルだけに傾倒しない、医師としても人としてもバランスの取れた総合医となり、地域医療に邁進した。

また、医療従事者向け蘇生トレーニングのICLS・ディレクターにもなり、蘇生という一つの目的に向かって、チームを形成していく、チームづくりにも取り組み、総合医としての活躍を個人だけではなく、チーム組織として発揮できる体制を整えた。

【新型コロナウイルスへの対応】

令和2年3月頃から国内においても新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が蔓延しはじめた。情報の共有が何より大事と考え、院内だけでなく、山口市医師会の先生方にも働きかけ、チャットワークによるオンラインの協議会を立ち上げた。

当会においても病院だけでなく、老健、有料老人ホームにおいて、次々と感染者が報告される中で、的確な感染対策の指示出しと同時に、自らも最前線で感染対策にあたり、その中で、共に協力してくれる職員の心のケアにも気を配り、目の前のコロナ対策と今後を見据えた体制づくりに全身全霊を賭して奮闘した。

自院のマスクをはじめとする医療物資が入手困難な際においても、山口大学の窮地を知り、関連するすべての教室及び、山口大学医学部附属病院へ数万枚の可能な限りのマスクの寄付・寄贈を行った。

【地域の歴史や文化への探究】

命をかけて山口市大内長野の人たちを苦しみから救った『二義少年』の歴史に触れ、立場の違いによって、見方が変わる事は、現在でも同様である事を地域の歴史を通じて学んだ。相手の立場に立って物事を考えるためには、人の背景、歴史や風土も関係していると考え、地域の歴史探訪に興味を持った。

また、歴史に関する研究をする中で、『山口に残る古代地上絵北斗図の謎（著：池畑 孝次郎）』に記載されている内容で、実際に山口市内の主要な神社を地図上でプロットし、線で繋いだところ、飛翔する鳳凰の地上絵が浮かび上がり、当院はちょうど鳳凰の首に位置することを発見した。

これは、山登りや神社仏閣巡りをライフワークとして行う中で、自らの経験則と桜木神社（大内矢田）の参道から一直線に鳳翔山の頂上が位置する事、鳳凰が翼を翻す様を現した鳳翔山という名称である事、そして、これらの地理的關係から、浮かび上がった気づきと発見であり、点と点とが一つに繋がった衝撃的な事実であった。

山口地域の歴史的な立地上の観点からも重要な拠点である事を確信した。

大内氷上にある大内氏の氏神でもある氷上興隆寺の妙見社の修繕事業の顧問を務め、歴史関係の団体では、大内史談会に所属した。

[→【二義少年の碑・鳳凰の地上絵】←についてはこちらから](#)

【専門医・指導医】

日本消化器病学会所属、日本消化器内視鏡学会所属、日本大腸肛門病学会所属、臨床研修指導医、
日本医師会認定産業医、厚労省更正医療指定医（人工腎臓）、ICLSディレクター、
全日本病院協会 総合医育成プログラム 修了 等

【人柄・エピソード】

温和な優しい性格で、常に自らがなすべき事を冷静に考え、まず自らが行動するタイプであった。他人への思いやり、優しさを持ち合わせると共に、自分への厳しさも兼ね備え、サーバントリーダーシップ（まず、相手に奉仕・支援し、その後相手を導くリーダーシップ）を発揮した。

動物好きで、獣医になりたいという夢もあったが、高校2年の時に、それまで、進路の事など全く口にする事のなかった父 眼治から『医者にならんか！？』という真剣な一言で、『これは本気で言っている。もっと早く言ってよ…』と思いながらも、医学部受験を決意した。

感受性が豊かで、小説やアニメ、音楽、陶芸、美術、絵画、などの芸術を好み、中でもギターを水平にひざの上に載せてピアノのように演奏するラップタッピング奏法による演奏を得意とした。

大きな問題に起きても、感情に流される事なく、一つの考えに固執せず、穏やかな春風のような心で人に接することができる人格者であった。患者さん、職員をはじめ、関わった多くの人々から愛され、『理想的な人柄』『春風の人』『地顔が笑顔』と称された。

山口市医師会の淵上 泰敬先生（淵上整形外科）には、第六五九回 ふしの句会にて、人柄を称するような俳句をご寄稿いただいた。

柔らかき 笑顔を律す秋の霜
春風の笑顔の君の心意気
またいつか笑顔が地顔芝桜

[→【山口市医師会報 第56巻11号 No.665】←はこちらから](#)

【早すぎる別れ】

令和4年9月19日に山口県を直撃した台風14号の影響によって、不慮の事故により他界した。
享年42歳。余りにも早すぎる別れであった。

[→【母 柴田 阿佐子 お別れの手記】←はこちらから](#)

[→【兄 柴田 三大 2つの誓い】←はこちらから](#)

[→【理事長 柴田 大明が説いた理念】←はこちらから](#)